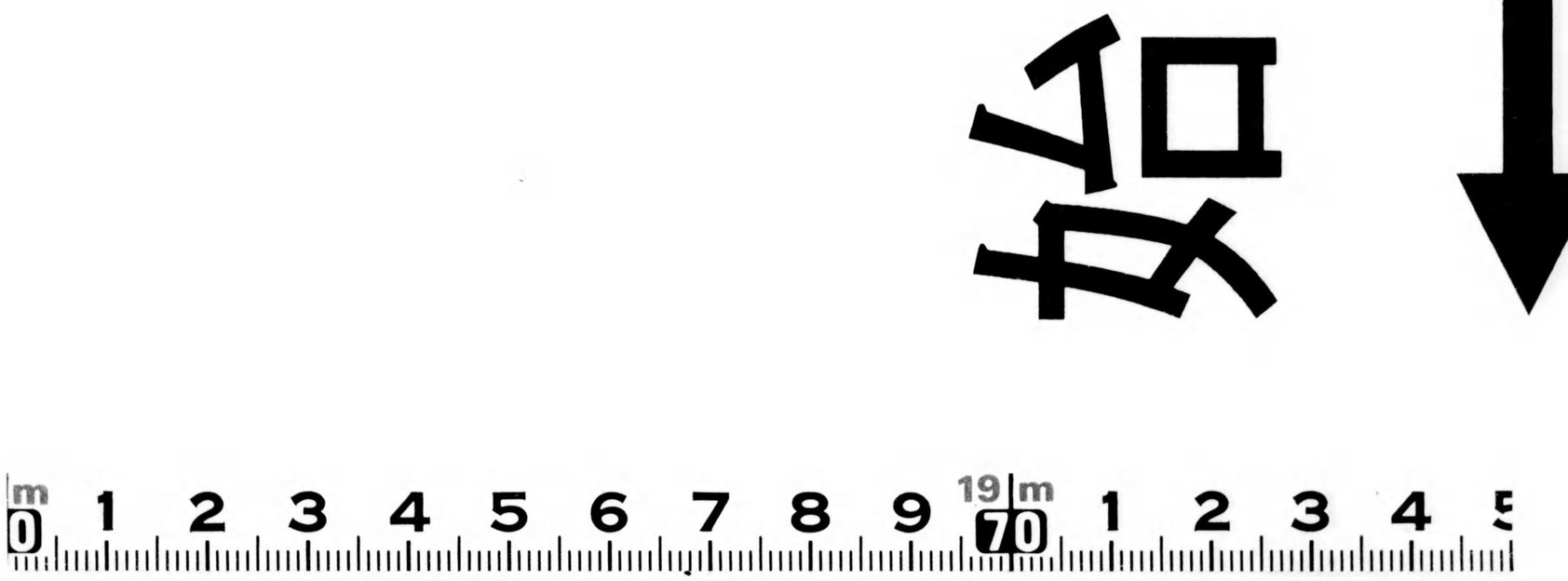
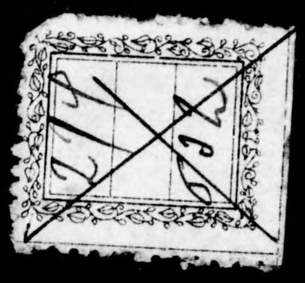

m
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
19 m
70 1 2 3 4 5



吉井勇

特101
200

小序

一、この歌集は予が曩に出板せる「水莊記」及び「戀愛小品」の中より、獨立して藝術的價値ありと認めたる歌を拔萃せるものなり。

一、予は「水莊記」及び「戀愛小品」等にて試みたる新しき形式の散文詩に倦み、且つその藝術的價値のあまり貴からざりしを思ふ。斯くて予は再び之等の徒爲なる制作に從はざるべし。

一、この歌集には猶最近の制作十數首を加へ、これを卷頭に置けり。

一、附錄として添へたる散文詩「人形」は、予が往日の「新しき試み」の遺物に過ぎず。

一、「水莊記」及び「戀愛小品」より之等の歌を拔萃することを許されたる、東雲堂及び初山書店の好意を謝す。

大正二年十二月　　著者

戀に生き戀に死ぬべきいのちぞと思ひ
知りしも君あるがため

うつつなく君が指などもてあそびわれ
はた何と云はむとすらむ

頬寄すれば鬢のほつれ毛三筋ほど觸れ
てはやくもわれを忘るる
黄揚の櫛黒の襟など好めるも君がはか
なきなぐさめにして

秋の夜はしづかに更けぬわが君の仇し
うたがひ解くるまにまに
あはれなる秋の女よかくおもひくちづ
けするも愁ひふかかり

頬を寄せてくちづけすればたちまちに
戀慕の闇となりにけるかな
紅玉の汝が指環のわが紋の水巴より夏
は來るらし

かへりみればすでに三年の昔なり夢幻
のなかに住みしは
かにかくにうき世の波の悲しさよかく
かこつ子となりにけらずや

新しき五人女のなかにして男ひとりの
怨まること

黒髪のもつとも長きひとや誰れ情もつ
とも深き子や誰れ

眼瞬きはこの蠟燭の灯のごとし風に當
てじと君をいだきぬ

わが胸にまた喜を増さしめし君よと云
ひて吸ひにけるかな

君がため遊ばすなりし少女らがなに惜
しからむ君を惜しめば
ただ二人ある時をのみ喜びぬいにしへ
よりの戀のならひに

ああわれら生命の家に住みながら生命
みじかきことを願ひぬ
歡會や初夏の夜の宵やみに接吻いと長
き子となりにけり

野路を往き森の徑を歩めども君をうば
ひに來るひともなし
戀人の時はあまりにはやく過ぐ晝もみ
ぢかし夜もみぢかし

たのしげに二人かたりぬ窓のもといと
あたたかき日光のもと
鶏さへわがたをやめを慕ふらむ日ど
と夜ごとに君が名を呼ぶ

ああ昨日ありとあらゆるたはむれにす
べてその身を投げし君はも
思ひ出づ黄金のごときまぼろしをその
まぼろしのなかの女を

唇はいまなほ痛したたむきもいまなほ
痛し春のたはむれ
わが君のもの狂ひこそ悲しけれ窓に凭
りては口笛を吹く

屋根裏やおもひでにのみ生くる子がこ
のごろいたく痩せにけること

蘇枋色の夢を夜な夜な見るもよしかな
らずなかに君あるもよし

濁りたる水のいろこそ堪えられぬ河邊
に立ちて君をおもへば

月ささばその夜のごとく輕らかに落葉
を踏みて君來るらむか

地に落ちてともに悲しくにほひけり君の涙とわれの涙と

いまもなほ君の吐息のきこゆるよ樹の間を洩れて夕日さす時

何時までも愁は盡きじかくあるも詮なきこととしてや眠らむ

ああながく見るに堪えむや黒髪のひかりもいたく失せたるものを

灰色の光を負ふて來りたる少女の肩に
手を懸けにけり

冬の日は冷たき金を撒きにけりおとろ
へし子はその金を踏む

しばらくはかたみに顔を反けぬ君の
おとろへ我のおとろへ

河氷をりから裂くる音きこゆかなしき
胸の傷にひびきて

かなしみに言葉もあらず潤みたる目こそは語れ胸のおもひを

沈默はやがて涙をいざなひぬ涙はやがて夢をさそひぬ

うつくしき少女のごとくわが前に冬の月來てさめざめと泣く

君が肩漣うちぬあはれ今いたいたしくもこころ泣くらむ

窓を押しあくる手さへもあらあらし玻璃戸に恨あらざるものを

この暖爐あたたかく燃えわれらまたあたたかく燃えし夜半やかへらぬ

もの云はぬその唇は吸はざらむいかにわれをば強ひたまふとも

戀びとはおほかた檻のなかに住む黄金の柵はまばゆけれども

君が胸わが胸合ひしよろこびに今か昔
の戀かへりきぬ

手をとれば手は火のごとし痛ましくか
なしくしばし放ちかねつも

音立てて焔も燃えぬわかうどは暖爐の
まへに口笛をふく

解きがたき謎と思へはおもしろしつめ
たく光る君が瞳も

二人凭れば戀の重さも加はらむ椅子も
あやうく思はれしかな

戀びとは呼吸もかをりぬうつくしき素
馨の花の匂ふごとくに

文がらはいとうづたかしあはれなる戀
のかたみに涙流るる

夕霧窓にみだれぬかかる日に文を破る
も悲しからずや

薄明のなかに消え去る君よりも悲しき
ものはなしと思ひぬ
朝起きてひとり心に占ひぬ今日はたい
かに君のおとづれ

わが君とまづ目に入りし文字ゆゑに心
みだれぬ戀しきかなや
抽斗にあふれんとする文の數百通にし
て春は來にけり

つぶやきぬこの河邊よりかの林しづか
に君が文讀むによし

わかうどは醉へるがごときここちして
君が言葉に誘はれにけり

砂山のふもとにありし向日葵の咲く日
をまちぬ君と見るべく

夏の日はべんがらいろに沈みたりあな
おもしろと君のながむる

砂原のうへに燃えたる陽炎のなかに消き
ゆべき君にやはあらぬ
晝の夢夜の夢いづれうつくしき覺めた
るのちはいづれ悲しき

あはれなる水莊守となりにけりかなし
き戀のおもひでのため
殘りしは砂山の香か君の香かなにはと
もあれなつかしき香よ

晝はただ林を歩み夜はただものを思へ
る水莊のひと

ふたなさけ二人をおもふ戀のためわが
身ひとつの置きどころなき

どりどりにうつくしければ棄てがたし
春の女よ秋の女よ

君が目もいたくうるめり夜の灯はなに
ゆゑかくは涙誘ふや

蠟燭もわれらとともに歎くらむ焔も白
くしめり靡きぬ

かなしげに女は火をば指差しぬやがて
消ゆべきことをしめすや

頼なき眼差なりやそれもまた戀するひ
とのならはしにして

しだらくに白き腕を投げ出せしなまめ
かしさよ君がうたたね

たはむれに疲れぬ戀に倦みはてぬ林に
入りてもの思はばや

もの思ふしばしの暇をあたへよと君に
乞へども許されぬかな

いやしげに戀をわらへる下司のため君
を棄てむと思ひ立ちにき

ああ暮春われらが戀もをはりぬと河を
ながめてひとり悲しむ

わかれてはまたかなしみに堪えがたし
風となりても君を求めむ

君あまりうつくしければ微風に吹かれ
てもなほ消え失せやせむ

あまたたび君よとわれは叫びにき聲は
空しく消ゆといへども

或るひとは林の奥の空地をばこのむ或
る日の或ることのため

地に伏して泣きぬこのまま呼吸絶えよ
君うしなひて何に生きむと

ああ涙わが心より流れ出で君が心へゆ
くよしもがな

いたましく茨に足も傷つきて棄てられ
びとはよろめきて來し

大河を見てはわが身の運命をうらなひ
しかなあはれなる子よ

一年は夢の如くに過ぎ去りぬもの思ふ
子の時ははやかり
われとわが變りしことにおどろきぬ戀
に姿のやつれしものか

ああ眞晝遠いかづちをききてさへかく
まで胸の躍れるものを
いらだたしわれのこころは火のごとし
熱き情の夏に堪えむや

あはれなる夏の愁ひか河風かなほ殘り
たる君の吐息か

微なる蜂の唸りにさそはれて夢見るご
とく來しやわかうど

戀びとよいざくちづけよ烈しくと叫ぶ
がごとき向日葵の花

君がためわがしつらへし夏の園その園
守のわれをあはれめ

妬みより憂きものはなし吸はすべき口
も吸はせぬ夜もありしかな

くちづけは女ふたりに分たれぬいづれ
多しと妬みたまふな

妬まざる女はかなし妬まれぬ男の身よ
り憂きものはなし

熱き呼吸熱き頬熱き唇と熱きもののみ
好みけるかな

わなわなと顫ふ肩にも手を懸けぬもの
の甘さをこのむ男は
しばらくは我とわが身を忘れたり君も
忘れてありや君が身

幻のまぼろし夢の夢のごとこの世のほ
かのうつくしきことと
夢おほくなりまされどもうら悲し夢こ
とごとく灰いろにして

火は灰にこころは石にわが家は墓にか
はりて夏もをはりぬ
復讐のあだとなりしは戀びとのなすべ
からざることと知られし

かんばしき君が露をばあぢはひぬ秋の
夜に啼くこほろぎのごと
うなだれて林に入ればわが君の聲きこ
ゆなり風のまにまに

百舌鳥啼きぬ夕日に木の葉かがやきぬ
わかうどの頬に涙流れぬ
蘆咲けばほのかに水の匂ひしておもひ
でいたくわが胸に沁む

やはらかに君とわれとを包みたる霧に
巻かれて死なむとぞ思ふ
蟲の音かほのかに渡る風の音かいづれ
か聴えこの月夜よし

かの月とわが傍のこの月といづれをよ
しとさだめかねつも
うつくしきものを悲しむそれゆゑに君
を悲しむましてこの夜は

河見ればその夜のごとく霧ながる霧は
涙をさそふものかな
暁の光のなかに身を投げて命死なまく
かなしむものを

夏過ぎて都もさむくなりにけり戀のな
き子は更にひとしほ

百舌鳥啼けばそぞろに悲しかる日の
かかる夕に君とわかれし

あかの夜霙降る夜にわかれしがなが
きわかれとなりにしものか

たをやめもなかに交りて薔薇の花投ぐ
るがごとく骰子投げにけり

この女よくいきどほりよく泣きぬやが
てその胸裂けやしぬらむ

紅燈のなかに育ちてわかき日のかなし
みを知る君なりしかな

君に會ひて何を語りし何を見しかにか
くにわれすべて忘れつ

無頼なる女なるかなともすれば男にま
ぢり博打つと云ふ

凄艶の女といまはなりぬらむ思ひ出す
もあはれなるかな

郊外の憂の家にすむひとは言葉少くな
りにけるかな

再會はかなしからむかく思ひなほそ
の時を待ちにけるひと

唇は焔のごとく燃えんとすあやふしと
云ふ聲のきこゆる

そらぞらし寒しつめたし情うすしされ
どなつかしかかる少女は
うつくしき女の顔と太陽とそのまばゆ
さを爭へる時

湖のなかより生れ來しひとかかく濡髪
を好みたまふは
ゆふぐれはかならず窓にわが君の光さ
すなり月魄のごと

われ知らず君が門まで來しわれを湖守
のわらふ夕暮

わが世またかかる悲しきおもひでのあ
らむやと云ふ聲もうるみぬ

夕空はうつくしかりきわれ思ふそれよ
り更にうつくしきひと

日は西に船は港に鳥は巣にかへるゆふ
べを君のかへらぬ

名は知らずほのかに黄なる花咲けり悲
しみ草とわれは呼ばまし
冬の夜の渚に立ちておもへらく海と君
とはいづれ悲しき

海見ればわが胸躍る去年の夏海幸いか
に多くありしよ
魂を海に投げ棄て來ぬと云ふ女の言葉
信じかねつも

かなしみを封じて送り來しものかひら
けば涙ほのかににほふ
海暗しつめたしと書き胸痛しはかなし
と書く君が文かな

おとなへば答だになし君が家かの水仕
女や今日も居眠る
砂山は白くつめたしたとふればいとも
はかなき戀の墓かと

海を見て涙をながすわかうどのなかに
わが身を見出でしも夏
おもひでの女の數の多かりし中にまじ
れる君なりしかな

あはれにも惱ましげなる眼差をする子に
となりぬものを思へば
夜もすがら都のなかをさまよひぬ胸も
裂けよと悲しめる子は

夏の夜の夢のやうなる月あかりわれと
君とにさすと思へば

蟲鳴きて夜露つめたくこぼれしよわが
手君が手觸れにける時

浪の音も微かになりぬくちづけに二人
はしばしわれを忘るる

ああ月夜かかる夜をこそ待てと云ひわ
が唇を吸ふひともがな

黄なる花ほのかに咲ける砂山に何を語
るとわれらありけむ
女みな戀にこころの狂ふ日も來よとお
もひぬたはれ男は

夢いまだ見果てぬうちに人の世の秋も
終りとなりにけるかな

歌麿の繪をおもふときふと胸に浮び出
でたる君にやはあらぬ

廣重の秋のいろかなかくかこち空を見
るこそ悲しかりけれ

ああ月夜そぞろあるきも君なくばその
甲斐なしと思ひけるかな

秋の夜の夢にかあらむうつくしき月と
あゆみぬ月とかたりぬ

女より悲しきものはなしと云ふことを
知りしも秋の夜のこと

わが心かすかに顫へ出づるほどきよく
かなしき月あかりかな

わが胸は日毎夜毎に燃えさかるむしろ
炎とならましものを

汐風とともにひろがる噂にもわれらが
ことを云ふが悲しき

わか君は日毎會ふべくはつ秋の櫻の園
をえらびたまひぬ

秋風はいとも冷たしわれらにはふさはじとふとかこちけるかな

かくてわれわれみづからを疑ひぬわれも戯曲のなかのひとかと

青ざめし君が面にあらはれし秋のいろこそ悲しかりけれ

あはれなる女よと云ひ涙するわかうどあるを忘れたまふな

もとむるは薄情びと秋の夜のかなしみ
をさへ知らざる少女
春も來ぬ人のなさけも燃え出でぬうつ
つなき日のつづくこの頃

こころにも烈しき光みなぎりぬねたみ
は夏にふさへるものか
晝も夜もわかたぬまでになりし子は目
覺めざりけり夏來れども

この謎を解かばあたへむ戀と云ふその
戀いかに悲しからまし
思ひ出はとりとめもなし月あかりほの
かにさせば更にはかなく

悲しくもふたたび秋はめぐり來ぬあこ
がれの秋おもひでの秋
戀がたりするにふさへる夏の夜の宵闇
にこそかなしみはあれ

夏深くかなしやと云ふわかうどの瞳う
るみて夜となりぬる

夏の夜の空にかがやく星よりもおほき
女のものがたりかな

君とこそ春の愁をかたらめと云ふひと
もなし世さへ厭へば

わかうどは櫻を見ても悲しめり君のこ
となどおもひ出でぬと

珈琲の香にむせびたるをかしさに一人
笑ふも春なりしかな

しみじみとものの哀れを思はする春の
ゆうべの薄明りかな

櫻みなうす紫となるころをたそがれ時
と名ければらしな

夜となりぬひとしほ春のここちしてな
まめく闇を見入るなりけり

黒髪のごときいろかな夜を見てかくか
こつ子もをかしからずや
喫茶店の前の櫻も咲き出でて彌生つい
たち夜となりにけり

春は來ぬものを悲しむわかうどもさす
がに心躍らざらめや
春は春秋は秋とてそれぞれにものを思
ひぬうらわかき子は

瞳まづ誘はれ遂にこころまで誘はれぬ
かの女のために
ほのかなる櫻あかりを身に浴びて一夜
さまよふわれにやあらぬ

唇は唇をもて目は目もてむくゐよと君
も云へりしものを
いかにせむかにかくにわれ惑はれつこ
のうつくしき仇敵はも

ややありて煙草の火消え恨消えかなし
さのみが殘りけるかな

口笛を吹けば愁をわするるとまたして
もわれは口笛も吹く

珈琲のにほひにさへも酔ふひとの戀い
かばかり悲しかるらむ

夏の夜ははやくも更けぬ戀がたりひと
つふたつを語らふひまに

かなしげに電氣扇のすすり泣く夏の夜
半ともなりにけらしな

かかる日のかかる園生に君ありき我も
ありきと歎きけるかな

夏の風君がかの夜のあたたかき呼吸を
おもへとばかり吹き來る

なにゆゑに泣くやなよ日向葵の花咲き
夏もさかりと云ふに

君泣きぬああわが夏は過ぎ去りぬああ
わが戀もまたと歎きて
ああ涙顔をおほひし雙の手の十の指み
な濡れにけるかな

戀に身をすべてまかせぬくちびるよま
たかの君のくちびるに往け
日々を戀に生くべきわが身ぞとつれな
しびとも戯れにけり

やはらかき夏の日ざしに目を閉ぢぬわ
が頬君が頬寄るがまにまに
黒髪を弄びつつおもへらくこの女にも
すこし倦みぬと

日向葵の花を名づけてかなしみの花と
のみ云ふ君なりしかな
灰いろの壁にむかひてもの思ふ女なり
けり戀にそむきて

わかうどの額に暗き影さしぬその暗き
影ながく消えずも

朝ごとに砂山に來るならはしをよしと
思はば朝ごとに來よ

いろいろに噂さるるもおもしろし戀に
生くべき少女と思へば

冷笑はいともうつくしかのひとのかの
冷笑はさらにうつくし

灰いろの光をはなつ砂やまを誰が名付
けけむ運命が丘

海丹を賣る媼がかたる戀がたりむかし
がたりに秋の夜は寢む

雪降りぬいとしめやかに雪降りぬ君が
かなしみ降るがごとくに

いま君がひとり思ふは雪あかりそれよ
りもなほはかなかること

雪見れはかなし見ざれはうらさびし冬
疾く往ねと思ひ初めける

冬の海遠鳴たかくなりまさる夜はきた
りぬ遂に君にも

ああ爐の火昨日にましてあたたかく燃
ゆるものかなひとを思へば

雪しろく月の光にかがやくを夢のごと
しと思ひけるかな

鈴の音は次第次第に遠ざかりふたたび
君の橇のかへらぬ

かへりみてひそかに思ふいくたびのく
ちづけの長し短し

かにかくにいづれと選びかねにけり夏
のくちびる冬のくちびる

ああ避暑地われの心のふるさともこの
頃いたく荒れにけらしな

われを吹きわが君を吹く南風いくつの
戀を吹きて來にけむ

くちづけのよしあしなどを語り合ふこ
とさへ夏と思はれしかな

くちづけを好むやと問ふをかしさに女
は笑ひくづれけるかな

くちづけを知らざるひとの悲みも夏の
日なればをかしかりけり

項巻けくちびるを吸へとばかりにここ
ろを誘ふ海のにほひよ
情火燃ゆ狂ほしきかなわかうどは眞晝
も夢を見る子となりぬ

いづこにも戀はありけり女よりのがれ
て更に往きぬ女に
わが胸のはかなきよりはややさむくや
やほのかなる薄明りかな

空遠くなほなにものかわが夢を誘ふも
ののありと知れりや
ほのかなるかの夕空を眺めつつ君よわ
が手置く肩もがな

夏の夜のあかつき近き窓あかり戀人な
らばかなしからまし
いづれをばよしとさだめむ覺束なたそ
がれの夢あかつきの夢

山を見てかすかに胸の痛む時わりなく
君のおもはれしかな

君をおもひ過ぎし日おもひ曉の空をな
がめてわれを忘るる

夏の鳥ほのかに鳴きぬ目覺めよと君呼
びさます聲のごとくに

わかうどの胸はも空しうつくしき女に
こころ盗まれしより

夏の日は黄金のごとくかがやけど奪ひ
がたかり君のひかりは

あわれら生命みぢかしとばかりに日
日戯れてあるべかりけり

ああ月夜君をおもへば玻璃窓に來てす
すり泣くしろがねのいろ

しめやかに木の葉のそよぐ音きこゆま
たかなしみや訪れて來し

わが膝は君の泣くべきところなり月も
差すなとつぶやきにける

月夜よし寝じなと云ひて戀びとはあひ
びきすなり夏の夜すがら

ともすれば涙をながす戀人よなどわか
き日をかくは悲しむ

ああよその戀など妬む身となりぬ昨日
はひとに妬まれし身も

ああ月夜君とあゆまばしろがねの光を
踏みて往きてかへらじ

わかうどは戀のことのみ思ふかな晝も
現無夜もうつつな

わかうどは日々夜々にかなしみぬ詮な
やこれも戀に生くる身

足引の山はなつかし君を見るここちぞ
すると山をながむる

うつくしき戀びとよりも更になほ忘れ
がたかり戀のかたきは
あはれにも額につよくしるされし惱の
あとをいつか消すべき

しづかなる眞晝となりぬふと思ふああ
今君とあらましかばと
何の實ぞいとしめやかに地に落ちぬそ
の響よりかなしみの來る

瞳燃え胸燃え頬燃えうつくしきほのほ
のごとき夏の女よ

ときめきぬ胸こそ騒げそはありのあは
つけびとの戀と知れども

おもしろき方を勝としあらそはむ君の
戯れわれのたはむれ

あなあはれ男は弱し見合はせし目のち
からにも負けにけるかな

狂ほしき夏の夢よりぬけ出でて來し女
かと君をうたがふ

あたたかき潮のなかに入るごとく君が
腕に身を投げにけり

薔薇の香にほひきたるにおどろきぬ思
ひも懸けぬ君が胸より

夢さめぬ夜とおもひしは黒髪のみだる
るなかに寢ねしなりけり

かなしくも木々の雫に立ち濡れぬ涙ほ
のかにほふ夏の夜

露を踏み月光を踏みわが君の涙のあと
を踏みてさまよふ

これをしも戀とやは云ふうたたねの夢
のなかなる戀に似る戀

さびしければかの鵜鴒とたはむれて瀑
のしぶきに濡れてかへらむ

ああ月夜このうつくしき瀑ちかく君を
立たせて見るよしもがな

瀑を見てまたかなしみぬわかうどは何
につけても君を思へば

ああ遂に心の傷は癒えずして夏も終り
とならむとすらむ

戀と死といづれをえらびたまふやと君
に問ひしもかかる夏の日

口ぐせにあはれ君よとさけぶまで戀ゆ
ゑわれの思ひみだるる

みやびをの髪みだれけり差櫛を貸すと
云ふべきひともあらねば

夏の夜のくちづけよりもこころよしわ
れを忘れていかづちを聽く

山路ゆき野路ゆきかくて君が家の戸を
たたく時たそがれは來む

なまめきし夏の夜半となりにけり戀の
ことのみ語りけるゆゑ
口笛は情を知れるたはれをがありのす
さびに吹くべきものか

わかうどは夜をよろこぶ月あるも月の
あらぬもそれぞれによし
夜はくだつ歌に合はする足拍子次第に
急になるがまにまに

戀がたりすればかすかに沈丁花にほひ
きたりぬ秋ならなくに

蛾といへばおもひで多し汝が灯を消す
をよろこぶ夜もありしかな

風吹けば玻璃もかすかに音立てぬゆゑ
わかなくに胸も騒ぐや

戀がたりおほかた盡きぬたとふればか
の白蠟の燃え盡きしごと

戀敵死ねやとばかりはなつべきわが拳
銃よすこやかにあれ

金星も涙さしぐみもの思ふ夜となりし
こそはかなかりけれ

頼なし切なしさびしうら悲し見棄てら
れたる我ならなくに

蘇枋いろそのあかつきの雲を取り君が
衣に裁たましものを

あかつきは悲しかるらむ戀人はみな烏
羽玉の夜をこのめば
戀をのろひ女をのろふ子と知らず君に
こやかにわれと語りぬ

悲しげの眼差なりや今ははや身も世も
なしと云ふがごとくに
戀人をおどろかすべきたはむれに手の
短銃をはなてるものか

目を開きぬしばらくありて目を閉ぢぬ
君なほ夢のあとを追へるや
短銃はいまだ叫ばず悲しげに默せるま
まに夏もをはらむ

君が目のまたたきしげくなりしより誰
彼時となりにけらしな
あたらしき戯曲のなかの女よりわがこ
の君はおもしろきかな

八月の海をおもひぬわかうどは傷つけられし胸を抱きて

夏空の涙のごとき雲のいろながめて君は何をおもふや

戀人はおどろきやすし風ふけば山覆へるものとおもひし

空遠くわれの心はあこがれぬ鳥ならぬ身の何を戀ふらむ

黒髪はあまりになが
しと君を厭ひ初めてき
ああ月夜君の涙があつまりて燃ゆるが
ごとき白蠟もがな

夜の空はほのかに赤しそのむかし君と
ながめし山火おもほゆ
山の鳥いづれわが身も山の鳥やがては
われらも山を追はるる

蟲の音をきけば涙のながるると云ふ君
われも蟲とならばや

歌のこゑ遠ざかりゆくはかなさを知る
ひとにこそ戀は語らめ

戀を棄てみづからも棄てかなしくも鴎
とねむる夜半なりしかな

北國の冬のみなとの星あかりほのかな
りしも忘れがたかり

銛を取るその手もむかしたをやめの手
を取りし手と云ふを忘るな
蠟涙がおびただしくも流れたる夜をわ
すれずと云ふは誰が子ぞ

星ひとつ窓のあなたにうるみたる光は
なつが悲しかりけり
短銃ものがたらむとするごとし古き
むかしの戀のうらみを

戀がたり悲しかりしと云ふべきかうれ
しかりしと云ふべきかまた
夜となれば死を待つひとも君を待つひ
ともなげけりおなじ思ひに

ああ三年戀もなくして過ぎし子のその
寂しさはいかばかりかは
ともすればその兒より短銃を取り出
すひとも涙ながしぬ

あらそひは女のことにはじまりぬかくて女のことに終らむ

夜は更けぬ浪のひびきも高まりぬ胸の痛みもまさりけらずや

戀の歌海の歌はた星の歌こよひはすべてかなしかるらむ

寂しくも友は笑ひぬかかるときむかしの戀のことや思へる

またしてもかなしき戀をものがたる夢

見るひとをとがめたまふな

人形

附錄

私の書棚の上には、一個の泥人形が置いてある。それは長い衣を被いだ女が、悲しげに項垂れてゐる姿である。布は顔を埋めてゐる兩手の肱の邊まで隱してしまつてゐるが、女が泣いてゐ

るところだと云ふことは何故だか見ると直ぐに分る。無論日本で出來たものではなく、亞剌比亞あたりの廢市の街盡頭で、薄暗い骨董屋の店先に置いてあつたのを、圖らずも漫遊の旅客に見出されたものであらう。

私はこの人形を見る度毎に、いつもあの哀れな女のことを思ひ出す。

しめやかに秋風吹けば棚の上の泥人形も涙するかな

泣女それも土もてつくりたる人形なれば悲しかりけり

人形を碎かむとしてためらひぬ悲しやこれも思ひ出のたね

その女今はいづこに往きにけむ思ひ出づるもあはれなるかな

三年ばかり前の秋ももう終らうとする時分のことである。私は長い間苦しんでゐた四幕物の戯曲を、漸く書き上げた喜ばしさに心も輕くなつて、久しぶりで夜の散歩を試みたのであつた。霧は深く都の上を蔽つてゐるので、辻々に立つてゐる瓦斯燈の灯も、二三間隔たるともう見えなくなつてしまふ。道で往き合ふ人々も、霧の中から現はれて、また霧の中へ消えてゆく。

雨でも降つたやうに濡れてゐる舗石の上には、果敢なくも散つてゐる柳の葉が、まるで藻屑のやうに亂れてゐる。

私が十字街の逵に立つてその方向に迷つてゐる時、肩を打つ者があるのに驚いて振り返つて見ると、そこには某劇場の舞臺監督で俳優を兼ねてゐる、一人の青年が微笑しながら立つてゐた。

霧降れば夜のともしびもうちしめり
まづかなしみにわれを誘ひぬ

なにごとか歎くがごとく夜をこめて
霧のながるる石だたみかな

われも濡れ君も濡れたる夜の霧を忘
るなと云ふひともあらねば

秋の夜を思ひ惱めるわかうどは柳落
葉を踏みてかへらぬ

「丁度好い所で會つたね。これから君の所へ往かうと思つてゐたんだ。」

彼は意味ありげに笑つて附け加へた。

「是非君に紹介して呉れと云ふ女があつたものだから。」

丁度この時何處かの時計臺で十時を報ずる鐘の音が霧の中から微に聽こえて來た。秋の夜

の都大路は、さすがにまだ往來の人が多く、跫音は絶間なく舗石の上に響いて、柳の蔭に佇んでゐる私達の心を、何となく落着かぬものにするのである。私はこの時不圖、友の背後に隱れるやうに立つてゐる、一人の美しい女の姿を認めて、遽に胸を躍らせたのであつた。

時を打つ鐘の音さへおぼつかな都大路も霧に暮るれば

ああ是の夜えやは忘るるかの君にはじめて會ひて語りしことを

君がため霧もうつくし君がため夜も

うつくしとたたへけるかな

友は二度微笑しながら、私にこの女を引き合はせた。女は或る新しい劇團に屬する女優の一人で、二三日前まである名高い諸威の戯曲家が書いた、悲しくも傷ましい社會劇の女主人公に扮してゐたのである。ああ、その時舞臺の上で狂へるが如くこの女の叫んだ聲はまだ明らかに私の耳に殘つてゐる。さうして今この女の聲を聽いて、それがあまりに舞臺の上と異なつてゐるのに驚いたのであつた。それは嵐よりも烈しく、こは微風よりもか弱い。

「何だか極まりが悪うございますわ。」友の方を振り返りながら、「あんなことをおつしやる

んですもの。」

とこしへにそのうつくしさ失はずあ
れ新しき女わざをぎ
君が聲そよかぜのごと聽ゆるよ柳の
枝のゆらぐまにまに

わが君の黒髪よりもややうすくやや
冷たかる夜のいろかな

私達は再び舗石を踏んで歩き始めた。霧の深
い夜だとは云ひながら、露肆はやはりいつもの
やうに並んでゐた。さうして私はいつもの骨

董癖から、それとなくその露肆の品物に目を注ぎながら、好奇の心に驅られてゐたのである。錦繪、印籠、莨入、さうして數顆の根付の珠。私達が幾度か同じ舗石の上を往き返りしてゐるうちに、都大路の夜は何時か更けてしまつて、往來の人も疎らになつて來るとともに、霧も次第に晴れて往つた。さうして空のあなたに微に星が現はれて來る頃には風が烈しく青柳の枝を吹いてゐたのである。

舗石を踏めばかなしき歌きこゆわがわかうどの夢やいづこと
霧晴れぬ星もかすかに現はれぬ胸の

うれひもやがて消ゆらむ

露肆のあるじもものの思ふ夜か古錦繪
に柳かつちる

もう十二時を過ぎたのであらう。露肆の數も少くなつて、懶うげに欠びをする商人の顔には、寂しげな表情が浮んでゐた、私はこの時不圖ひとつの露肆の前に立留まつた。さうして思はず女に向つてかう叫んだ。「ご覽なさい、あの人形を。まるで泣いてゐるやうぢやありませんか。」

私達はその人形を長い間眺めてゐた。さうして女は到頭その人形を買つた。觸れば碎ける

かと思はれる程、哀れに脆い泥人形。それが如何して今私の書棚の上にあるのか。讀者よ。私の物語はこれから哀調を帶びて來なければならない。

秋の夜はいよいよ深しかなしみもいよいよ深しわが戀もまた

君がためいのちも棄てむかく胸に思ひさだめしわれと知れりや

君を見るわれのいのちを見るごとしこの夜をながく忘れずもがな

人形はわれらが戀のしるしなり脆き
はひとの胸にかたどる

その夜から私とこの女とが烈しい戀に陷つたのは、何も不思議なことではなかつた。併し唯不思議なのは、あの露肆で買つた泥人形である。女が或る日の朝不圖その人形を取り上げた時、底から灰のやうな土がこぼれ出したので、何の氣なしに覗いて見ると、そこには手紙のやうなものが押し込んであつた。女が簪の柄で引き出して見ると、それは獸の皮から造られた紙片で、何だか一面に書いてあるが、象形文字ばかりで讀むことが出來ない。さうしてそれも如何やら血汐を鵞鳥の羽にでも含ませて書いたの

らしい。

戀に落つやがてほろびむ身と知らず
戯るること日々にして

わが戀の炎のごとしましていま熱風
われらふたりを吹けば

戀ひとは不可思議ごとも世のつねと
こととするこそをかしかりけれ

女はこのことを話しながら、私にその紙片を示した。草木禽獸の形をした文字が、謎のやうに書き列ねてあるばかりで、誰も讀むことが出來

るやうにも思はれぬ。併しこの文字を凝視めてゐると、何となく心に感じて來るものがある。それは戀の恨である。それは戀の呪ひである。それは戀の歎である。沙漠を過ぐる隊商の駱駝の鈴の音絶え絶えに、日も狂ほしく輝きながら遠き地平に落つる時、蠻歌をうたふ少女にも悲しい戀はあつたであらう。新しい星は夜ごとに空に現はれるが、神の戰に加はるために、南に走つた若者はまだ還らぬ。少女は日毎に自分の姿を人形に造る。さうして小女は夜毎に自分の指を嚙んで悲しい血汐の文を書く。

鳥は鶴けだものは豹草は羊齒木は椰子をかき繪ぶみをつくる